

発 達 14 (298~304)

座長 三浦香苗・山崎愛世

- 298 幼児の数量概念についてⅩ
——長さの間接比較：その1，調査——
千葉大学 三浦香苗
- 299 幼児の数量概念についてⅩ
——長さの間接比較：その2，教授——
玉川大学 西谷さやか
- 300 数の保存と量的言語表現との関連について
東北大学 足立智昭
- 301 知的操作とその主体について
福井大学 山崎愛世
- 302 「三つ山問題」における課題設定の問題
——「他者に見せる」構成法と「視点からの」選
択法——
山形大学 畠山孝男
- 303 重さの保存の発達(4)
——垂直的デカラージュについて——
尚網短期大学 浜崎幸夫
- 304 幼児における物の同一性について
お茶の水女子大学 加藤佳子

300 について、三浦から、「うれしくない」という主観的なことばを用いた理由は何かとの質問があり、1)言語課題に影響を与えないようにするため、2)保存課題から数量に関する言語理解能力にかかわる要因を極力除くためであるとの答えがなされた。また、畠山から、言語課題に、なぜ大きさの次元を導入したのか、という質問があった。大きさの次元を導入して2次元課題を作った理由は、刺激と配列の項数を関数とすることにより、幼児の中心化傾向の変化を探る目的があった。移行群、非保存群は、項数が大きくなるにつれ数の次元への反応が減り、大きさの次元への反応が増えていた。保存群には、そのような変化は見られなかったとの答えがなされた。

302 について、西谷から、教示の狙いが課題の要求が理解できないことから起る誤反応を排除することにあるとすれば、誤反応中の「自己中心反応」の割合はむしろ増加するのではないか、との質問に対し、本研究では、教示をわかりやすくすることと課題を容易にすること(1対象の導入)によって、幼児が他者の視点をとれることを明らかにしたかった。Piaget は、9—10歳児にふさわしい課題を用い、幼児の反応について「自己中心性」という概念によって誤って説明したと考えている、との答えがされた。また、中塚から、選択群2が選択群1に

対応する手続になっていない。選択群2は地点を指摘する課題ではないかとの質問に対して、選択群2は、4つの人形の中から選択させる課題なので、選択群2としたとの答えがなされた。また、中塚、三浦から、表2についての質問がなされた。まず、自己中心的反応の絶対頻度がどの程度であったのか。これに対して、構成群1では4才児よりも5才児の方が多い(課題2と3で、4才児では53と50なのに対して、5才児では61と67)。構成群2では4才児と5才児の間に差がないとの答えがされた。次に、構成群1で4才児にくらべて、5才児で上述のように自己中心性反応が多くなっているのはなぜか、サンプルの変動なのかとの質問が出された。サンプルの変動の可能性もあるが、教示がわかりにくいいため、どう反応すればよいかに確信が4才児に持てないためではないかとの答えがなされた。

303 について、西谷から、重さの保存反応の前提として課題場面についての物理的知識が必要で、そのため小6で教育効果が見出されているのではないか。大学生や大人の誤答まで保存の未達成ということで説明してしまうのはどうかという質問がなされた。教授の効果が一時的なものではないかということだとも考えられるとの答えがなされた。寺田から、この課題で塩が見えなくなることと、Bower の感覚運動期での物の永続性を問題にした場合の「もの」がみえなくなることとのつながりがあるのか。両者のものの存在の理解に垂直的につながりがあるということ推定する根拠はどこにあるのか。この質問に対して、感覚・運動的水準、表象的水準の両方で対象の永続性確立の諸段階が未確立、移行期、確立期とかなり類似しており、垂直的デカラージュを示す例と見なせるのではないかとの答えがなされた。

304 について、岩田から玉の所在の誤反応は課題1、2、3、で均等に出現したか。4才児で誤反応が増加したのは実験者との対人関係の変化を含む magical thinking の結果ではないのか。子どもに「玉を取り出せるか」と質問をすると結果は変わるのではないかとの疑問が出された。答えとして、加藤から課題間の誤反応の差はなかった。子どもの反応の中に、magical thinking によると思われるようなものはなかったように思うとの発言があった。

以上の他に発表への補足、および若干の質疑応答があったが、紙面の都合で割愛する。

(文責 山崎)